

---

# 軽断罪

BALU - R

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

軽断罪

### 【Nコード】

N3510Z

### 【作者名】

BALU-R

### 【あらすじ】

このページを開いてくれた皆様、はじめまして。

喪福 笑美《もふく えみ》と申します。

唐突ですが日々の生活に疲れてませんか？

学校でちょっかいを出してくるあいつ。

たばこ吸ってるのが見つかって退学になればいいのに。

会社で嫌味ばかり言う上司。

使い込みがバレてクビになれ。

電車でバカみたいに大声で喋ってるDQN。

電車の外に飛び降りろ。

インターネットの掲示板で粘着してくる厨。

ウイルスに感染して破滅しろ。

そんな皆様のイライラを代わりに解消いたしましょう。

お代ですか？

これはあたしの趣味みたいなものなので要りません。

強いてあげるなら覚えておいてください。

あたしのお話を。

## 傘泥棒

「ちつ、いつの間に降り出したんだよ…」

あまがさ 天笠 とある 徹はコンビニを出て悪態を付いた。

学校帰りにコンビニで立ち読みをしている間に雨が降ってきていたのに気付かなかったのである。

もちろん、傘は持ってきていない。

「天気予報だと夜からじゃなかったのかよ！」

彼には選択肢がたくさんあった。

この店で安い傘を買う。

おさまるまで少し雨宿りして行く。

濡れるのを覚悟して走って帰る…

しかし、彼の選んだ行動は。

「安物つばいよな…」

コンビニの傘立てに透明のビニール傘が入ってるのに気付く。

徹は店内の様子をチラッと見た後に、透明の傘を取って店を後にした。

数10分後、店内から出てきて傘立てを見た男性が途方に暮れる。

次の日、学校の休み時間に徹は友達と他愛のない話をしていた。

「なあ、小さい犯罪とかした事ある？」

仲間内の加藤が話題を振った。

徹は笑いながら言った。

「何だよ加藤。自首するなら付き添うぜ？」

「そこまで大きいんじゃないかって！山根はどう？」

加藤に山根と呼ばれた友達は言った。

「立ち小便ぐらいならなあ。これって犯罪？」

加藤は笑って言った。

「充分犯罪！実は俺さあ、昨日万引きしちゃってさあ。」

徹は少し驚いたがそれを隠して言った。

「お前にそんな度胸があるとはな。」

「いや、そんなつもりはなかったんだって！後で会計しようと思っ  
てたら忘れててさあ。家に帰ってから気付いたんだよ。」

こういう話になると武勇伝の語り合いのようになってくる。

徹も何かないかと考え思いついて言った。

「そんなんでいいなら俺もあるぞ。」

山根が興味津々に聞いてきた。

「何、天笠。覚せい剤でもやったのか？」

「それはやりすぎだ！いや、昨日雨降ってきたじゃん。傘持ってな  
かったからちよつと拝借。これって犯罪かな？」

加藤がニヤニヤしながら言った。

「立派な窃盗です！天笠君、懲役20年！！」

「アホか。安物のビニール傘で。」

そこまで言つて徹は立ち上がった。

「ちよつとトイレ」

「あつ、一緒に。」

「気持ち悪い！一人で行くよ！！」

そして教室を後にした。

トイレは教室から少し距離があつたので天笠歩きながら物思いにふ  
けていた。

（うーん、傘を借りた程度じゃ弱かったかな。もう少し…いや、俺  
つて真面目に生きてきたからな。）

「…何で盗んだの？」

小さいが透き通った声に驚かされ徹は振り向いた。

そこには一人の女生徒が立っていた。

（こいつ確か同じクラスの喪福…）

変わった苗字なので覚えていた。

しかしそれ以外は特に目立ったところもなく、教室のスマで携帯電話

をいじってる大人しい地味な子であった。

「何で盗んだの？」

（こいつ、こんな声してたのか…）

声どころか長い前髪に隠れて表情も見にくい笑美に徹は言った。

「えっと、何の話？」

「傘。」

「ああ、さっきの話聞いてたの？何でって、いや、安そうな傘だったし。」

（あれ、こいつの席ってかなり離れてなかったっけ？）

「そ。」

笑美はクルリと背中を向けた。

徹は少しホツとした。

しかし、笑美は再び徹の方に向き直し、邪魔な前髪を舞台幕を開くように両手で押さえた。

髪に隠れていた顔が予想以上に美少女だったことに徹はドキっとした。

笑美は徹の目を見つめながら静かに言った。

「…謝りたくなったら言いに来なさい。」

そう言つと髪を戻し再び背を向けて去つていった。

「くそ、何だつて言うんだよ！」

学校からの帰り道、徹はブツクサ独り言を呟いた。

「何でお前に謝るんだよ！意味わかんね！！」

徹はふと立ち止まり電柱の裏に隠れた。

昨日のコンビニの前に来たのだ。

もちろん、誰かが傘を捜したりはしていない。

それどころか雨が上がった今は傘立てすらない。

（当たり前だ！何やってんだよ俺は！！）

そしてその場所を後にした。

「ただいまー。」  
家に着いた。

ふと傘立てが目に入ってくる。

昨日のビニール傘もそこにはあった。

ちよつと母親が奥から出てきた。

「おかえり。そういえばその傘どうしたの？買ったの？」

「…ああ、昨日雨が突然降ってきたからな。」

徹はぶつきらばうに答えると自分の部屋に向かった。

自分の部屋で着替えていると携帯電話が鳴った。

「メールだ。加藤か山根かな？」

送信者名：喪福 笑美

タイトル：おっぱいもみもみ

本文：罪を隠すために罪を重ねるの？

「何だこれ!？」

思わず叫んだ。

「あいつアツタマきた!」

感情のままに返信を打ち始めた。

タイトル：ふざけんな!

本文：何で話したこともないお前にこおまで言われなきゃいけないんだ!誰にアドレス聞いたのか知らないが二度と送るんじゃないねえ!  
!次に送ったら女でもただじゃおかないからな!!

「っ送信!!」

送信を押したが:

いつもの手紙が飛んでいくアニメーションが流れたところで携帯の電源が切れた。

「何だよ、充電切れか!」

乱暴に充電器に指した。

ベッドに寝転がり漫画を開く。

だんだん、冷静になりふと思った。

（あいつのメルアド登録していないのに何で送信者名が表示されたんだ？）

電話帳に登録されていない場合はアドレスが表示されるだけのはずだが…

昼間に見た笑美の顔を思い出す。

美少女という第一印象だったがむしろホラー映画に出てきそうな…

（馬鹿馬鹿しい！何か裏技があるんだろ！！）

次の日、徹は傘立てにあるビニール傘を手に取った。

そしてゴミ捨て場に投げ込んだ。

「ざまあみろ！」

そういつて学校に向かった。

教室につくと加藤と山根が徹の席の近くで喋っていた。

「おはよ…」

そこで気付いた。

自分の席の横にビニール傘が立てかけてあることに。

「なっ…!?!？」

視線が笑美の方に行く。

笑美は視線に気付いて昨日の様に前髪をどかしながらこちらを見た。

昨日とは違い無表情ではなくニタニタと笑っていた。

「お前の仕業か！！」

ビニール傘を笑美の方に投げつけた。

鈍い音と共に絵美の額に当たり血が流れ出る。

教室が大騒ぎになる。

「おい、何やってんだよ徹！」

教師が何人か教室になだれこんできた。

「くそっ！悪いのはあいつなのに…」

徹は停学処分を言い渡され下校しているところであった。

「たかが傘じゃねえか！！」

その手にはビニール傘があった。

徹の荷物だと思い、教師がカバンと一緒に渡したのであった。

ブツクサ言いながら歩いていると、例のコンビの前についていた。

「くそっ、返せばいいんだろう。返せば。」

傘立てに入れようとしたが、今日も傘立てはなかった。

それどころか。

「へ、閉店！？」

もちろん、今回の件とは無関係であろう。

しかし、タイミングが…

「もし、すみません。」

声をかけられ振り向くと老女が立っていた。

「この辺に川越病院はなかしら。」

「あー、それならここをまっすぐ歩けば。」

「ありがとう：息子がね肺炎で重体でね。何で昨日の豪雨の中を傘

も差さずに歩いたりしたんだか…」

そんな事を言いながら老女は病院に向かっていった。

徹はそこに立ちすくんだ。

「そんな馬鹿な：偶然だよな？」

「偶然じゃないわ。」

後ろには笑美がいつのまにか立っていた。

前髪をどかしながら今度は無表情で。

「傘を盗まれたせいで：もうじき死ぬわ。あのお婆さんの息子は。」

「そんな：！盗まれたって他にも選択肢があったじゃないか！傘を

買うとか雨がやむのを待つとか！！」

「盗まれないって選択肢もあったわ。」

徹は黙ってしまった。

「謝るのね。先に行つて。」  
次の瞬間、徹は目の前が真っ暗になった。

「っしゅん!」

自分のくしゃみで目が覚めた。

体の側面がブヨブヨして気持ち悪い。

泥の地面に寝そべっていたんだ。

「どこだここは？」

よく見ると全裸になっていた。

「何だ!？」

周りを見渡すと真っ暗であった。

上を見上げると空が高かった。

そう、穴の中に徹は閉じ込められたのであった。

外から笑美が顔を見せた。

「おい、出してくれ!」

「いや。」

「俺がどうする気だ!ここで飢えて死ねつて事か!」

「その前に体温を奪われて死ぬわ。天気予報だともうじき雨が数日  
続くんですつて。」

「俺が何したつて言うんだ!傘を盗んだだけじゃないか!殺され  
るほどの事はしてないだろ!!!」

「だって、これがあたしの趣味だもん。」

徹は壁をガリガリ掻き篦りながら考えた。

(趣味?殺人鬼か!?!いや、違う…思い出せ。)

最初に言われた事を。

「…謝りたくなつたら言いに来なさい。」

「そうだ、すまなかつた!謝る!許してください!!!ごめんなさい  
!!!」

悲痛な叫びに笑美は言った。

「何であたしに謝るの？意味分かんない。」

ニタニタ笑いながら。

曇り空を見上げながら笑美は言った。

「そろそろきそう…傘持ってないから帰るね。」

笑美が帰りのバス亭でバスを待っていると先ほどの老女が来た。

老女は誰かと携帯電話で喋っている。

「ええ、そう。思ったより大丈夫みたい。この雨が上がる頃には退院できるって…」

笑美はカバンから携帯電話を取り出し、いじり始めた。

いつものように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3510z/>

---

軽断罪

2011年12月11日23時49分発行